

# かいたく

教会のない地域に教会を 刈り入れ場に働き人を



アモスはアマツヤに答えた。「私は預言者ではなかつたし、預言者の仲間でもなかつた。私は牧者であり、いちじく桑の木を栽培していた。しかし主が群れの世話をしていたところから私を取り主が私にこう言われた。『行って、わたしの民イスラエルに預言せよ』と。(アモス七章十四〜十五)

牧師の後継は、無牧教会であろうとなかろうと常に考えておかなければなりません。そして、それは牧師だけが考えることではなく、教会全体で常に祈り、備えておくことです。

アモスは南王国ユダの地から北王国イスラエルの王のもとへ主のメッセージを伝えるために遣わされた人です。そのアモスはそれまで畜産と農業を営む普通の人でした。預言者としての訓練を受けた人でさえも怖じ気づいてしまう状況ですが、アモスは自分の仕事を残して忠実に主の務めを果たしました。

テトスへの手紙の中には、パウロがテトスに、「私があるあなたをクレタに残したのは、残っている仕事の整理をし、私が命じたとおりに町ごとに長老たちを任命するためでした。」とあります。

牧師も信徒の一人です。その一人が主からの呼びかけを受けて牧師となるための学びを訓練を受けていきます。ですから、私たちクリスチャン一人一人は、いつでも神様からの呼びかけに応えられるように、祈りと献身の思いを持って備えていくことが大切だと思います。

JBBF国内宣教委員会委員長・榎本昌博

かいたく 2021年4月発行 第83号 発行元:JBBF国内宣教委員会 長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉4696-27 編集責任:榎本昌博 デザイン:元田健次



## 後継者アンケート



昨年夏に、柏教会の三澤隆男先生よりお電話をいただいたことをきっかけに、委員会にてJBBF諸教会を対象に「後継者アンケート」を実施いたしました。また、11月にインターネットを通して行った国内宣教カンファレンスにおいても、三澤先生より「教会の後継者・献身者の輩出の課題」というタイトルでの講義をいただき、日本の少子高齢化の影響だけが原因ではないけれど、教会にとっての担い手と原動力になる若者の姿が消え、高齢者が目立つようになっていることを憂う一方で、教会は主がかしらとして建て上げられ、支えられるものであって、人々の熱心や理解力で維持されるものではないという励ましをいただきました。

さて後継者アンケートですが、約三分の一の教会から回答をいただきました。その中で「後継者対策を始めているか?」という問いに対する回答は、YesとNoが半々でした。そして、Noと答えられた方たちの理由で目立ったことは、「経済的また教会の規模などの理由で後継者を迎えられる状況にはない」という答えでした。また、Yesと答えられた方も、後継者対策としてだけではなく信徒訓練や学びなどの取り組みを通して、その中から牧師を目指す献身者が起こされることを祈ってはいるが、献身の決心に至るまでの人材が起こされない状況という回答でした。

「フェロシップに期待すること」という問いには、後継者をマッチングする体制作りと情報の共有、神学校による献身者育成のプログラム作り(神学校が諸教会にとって身近な存在と感じられたり、献身者だけが学べるのではなく献身を学ぶところとして)などがあげられています。その他に諸教会の取り組みとして、信徒説教者の育成、また牧師職を担いながら一般職を兼ねる「ファーマー・プリーチャー」の育成と登用などの紹介がありました。



## 退任のごあいさつ 上越聖書バプテスト教会 牧師:加治佐 清也



この度、三期つとめて参りました国内宣教委員会を退任することとなりました。諸教会の先生方、姉妹の皆様のお祈りに心から感謝いたします。何かの役職に選ばれる心の準備が全くない中で選任され、戸惑ったことを今でも思い出します。ですがその後の9年間は様々な先生方とともにご奉仕させていただく中で、多くのことを教えられた大変有意義な時間でした。

特に印象に残っているのは、この委員会の常に献身的な姿勢でした。開拓伝道のために、あるいは困窮している教会のために何かできることをしたい。そのような志にいつも満ちていたように思います。そういうテーマの時には、議論がいつそう活発になり、速やかな対応に努めていました。従来からの国保補助や特伝等の補助、基金運用を通してのサポートに加え、会計が充実してきたときには、年始のカンファレンスへの補助拡充・全額サポートなど積極的に活用しました。また昨年はコロナウイルスによる影響を受けた伝道師家族・教会を支援するために速やかに支援体制を整え、ご利用いただきました。さらに5月には、諸教会からの提案を受け、コロナ対策のための基金を設立し、多くの献金を賜り、神学生の支援などに用いていただきました。支援の申請があると委員会ではそれを分かち合い、用いられたことを喜び、主に感謝しました。このように、諸教会の支援のために積極的に仕えようとする委員会の変わらぬ姿勢を分かち合えたことを感謝します。

もう一つ、2013年から始まった伝道所訪問も大きな恵みでした。訪問先の先生方と直接お会いし、教会の様子を伺ったり、町の様子を肌で感じたりしたことは貴重な体験であり、委員会の祈りと働きの土台を形作るものでした。道中の委員の先生方とのお交わりも良い思い出です。

ありがとうございました。今後も委員会がさらに祝福され用いられますよう、お祈りしています。

献金振込先(郵便振込)  
00140・2・654375  
JBBF国内宣教委員会





# 素晴らしき哉、人生!

## IT'S A WONDERFUL LIFE

### Ken Board Missionary to Japan

「まさか!」これが献身する導きを感じた時の私の反応でした。なぜなら主は自分の働きのために、私のような者を用いることはなさらないと思っただからです。四ヶ月後、私は宣教師になるように導かれ、神学校を卒業後、母教会に戻って奉仕をしました。そして1964年に、その教会から日本に派遣されたフリン先生とお会いしました。フリン先生との友情を通して、私と妻は日本人の魂に重荷を持つようになり、1966年に私たちは日本宣教のために献身しました。

一年半のデビュテーションの後、私たち家族は1968年4月4日に来日しました。その時、フリン先生は九州で伝道していたので、私たちは先ず九州に行きました。最初の3年間、福岡市と北九州市の間にある宗像で先生と一緒に働き、1971年の10月に北九州聖書バプテスト教会の開拓伝道を始めました。

今日まで、私は九州で五つの教会の開拓伝道に参加することができました。しかし、多くの同業者の助けがなければ、現在の教会は一つも存在していないかもしれません。わたしは九州と一緒に働いてくださった先生方に心から感謝しています。もちろん、牧師がいても教会員の存在なしには教会を立て上げることはできません。忠実な教会生活と奉仕によって私の働きを支えてくださった多くの兄弟姉妹に言葉で言い尽くすことができないほどに感謝しています。

私は、宣教師として日本に遣わされて本当に良かったと思っています。これは最近、私が小倉教会の週報に書いたメッセージです。

「もし、あなたが今まで観た人生を要約する映画のタイトルを選ぶとしたら、どの映画を選びますか? 私は『素晴らしき哉、人生! (It's A Wonderful Life)』を選びます。もちろん、私も色々大変な経験に遭いました。親の離婚、父と母と妻の急死、ガンや他の病気との戦い。しかし私は13歳でキリストを信じ、17歳で自分の人生を主に捧げたので、私の人生は素晴らしい人生となりました。主の御声に聞き従ったので、私はアメリカの多くの教会を訪問して、多くの牧師や宣教師と50年以上続いている友情を築くことができました。主の御声に聞き従ったので私は新しい文化を経験し、多くの素晴らしいクリスチャンと共に神様の働きをすることが出来ました。主の御声に聞き従ったので、私は日本に来る迄、食べたことがなかった長崎チャンポン・餃子・すき焼き・カレーライス・抹茶アイスクリームの様な美味しい物を食べる事ができました。主の御声に聞き従ったので、私は殆どのアメリカ人が見た事のない素晴らしい景色を見ることができました。富士山に行き、歩きました。東京スカイツリーを見ました。京都の壮大な建物を見ました。阿蘇山の頂上に立って世界一大きな火山の火口を見下ろしました。」

この多くの祝福の上に、私は特に一つのことを感謝しています。それは、神様が私に福音を聞いたことのない大勢の人々にキリストの栄光ある福音を宣べ伝える特権を与えてくださったことです。帰国を発表してから、私は自分を褒めてくださる電話と手紙をたくさん受けています。しかし、それに対する私の言葉

「もし、あなたが今まで観た人生を要約する映画のタイトルを選ぶとしたら、どの映画を選びますか? 私は『素晴らしき哉、人生! (It's A Wonderful Life)』を選びます。もちろん、私も色々大変な経験に遭いました。親の離婚、父と母と妻の急死、ガンや他の病気との戦い。しかし私は13歳でキリストを信じ、17歳で自分の人生を主に捧げたので、私の人生は素晴らしい人生となりました。主の御声に聞き従ったので、私はアメリカの多くの教会を訪問して、多くの牧師や宣教師と50年以上続いている友情を築くことができました。主の御声に聞き従ったので私は新しい文化を経験し、多くの素晴らしいクリスチャンと共に神様の働きをすることが出来ました。主の御声に聞き従ったので、私は日本に来る迄、食べたことがなかった長崎チャンポン・餃子・すき焼き・カレーライス・抹茶アイスクリームの様な美味しい物を食べる事ができました。主の御声に聞き従ったので、私は殆どのアメリカ人が見た事のない素晴らしい景色を見ることができました。富士山に行き、歩きました。東京スカイツリーを見ました。京都の壮大な建物を見ました。阿蘇山の頂上に立って世界一大きな火山の火口を見下ろしました。」

この多くの祝福の上に、私は特に一つのことを感謝しています。それは、神様が私に福音を聞いたことのない大勢の人々にキリストの栄光ある福音を宣べ伝える特権を与えてくださったことです。帰国を発表してから、私は自分を褒めてくださる電話と手紙をたくさん受けています。しかし、それに対する私の言葉

## 米国における信教の自由

### アガペ聖書バプテスト教会 マイケル・バーゲット

コロナ禍の危機により、世界中が変わりつつあることは否めません。また、コロナ禍後も元には戻らないだろうと言われています。コロナ禍の危機により、米国の信教の自由が損なわれつつあることを感じる今日この頃です。以前から感じていたものの、コロナ禍の危機がそれをさらに加速させています。

### バプテストと信教の自由

「信教の自由」はバプテストの特徴の一つです。時には「良心の自由」、「政教分離」などのような表現も用いられます。教会史を見ると「信教の自由」は稀です。初代教会において多くの信者が殉教されました。後にカトリックもプロテスタントも他の信者を迫害しました。多くの迫害は国教会によるものでした。私たちのバプテストの先輩の多くが迫害に遭いました。

信教の自由の根拠を「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが神の前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません」(使徒四章一九〜二〇節)という使徒たちの発言に見出します。その原則は聖書全体に見られます。神が人に自由意志をお与えくださったことも、その根拠となります。主の求めておられる礼拝は心からの礼拝です。従って、真の礼拝は強制できないのです。信教の自由は重要な聖

書の教えの一つで、バプテストの特徴の一つでもあります。

### 米国における信教の自由

米国憲法の権利章典の修正第一条によりますと「合衆国議会は、国教を樹立、または宗教上の行為を自由に行うことを禁止する法律を制定してはならない」となっています。この第一条によって、四つの自由が保証されていますが、その第一が信教の自由です。

ヨーロッパほどではなかったがバプテストは米国においても迫害されました。イギリス植民地時代に時と場により国教会に加わらないバプテストは罰金や監禁されることもありました。独立戦争後、バージニア州のバプテストが一万人の署名(当時の投票者数の一割ほど)を集めることにより、その州の国教会制度を廃止することになりました。その影響もあり、15年後には上記の修正第一条ができたのです。米国での信教の自由を勝ち取ったのはバプテストだったと言っても過言ではありません。

世の中の様々な迫害と比べるなら、米国では信教の自由が全く損なわれていないと言えるほど迫害が少ないのです。しかしながら、信教の自由が年々徐々に失われつつあります。近年ではクリスチャンや教会がLGBTQ+などのことではしばしば訴えられています。LGBTQ+が公民権と見なされ、その批判がヘイト

は、創世記の41章にバロの前に立ったヨセフの言葉と同じ言葉です。「私ではない。神が」。私は献身した日から今まで神様が九州でのご自分の働きをするために私のような者を選ばれたことに驚いています。私の53年間の働きを説明する聖書の箇所はコリント人への手紙第一章二七〜二八節です。

「神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものがない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。」

これからも主が日本を豊かに祝福してくださいますようお祈り申し上げます。



1965年  
ボード先生とルイーズ先生



2005年

また、迫害の中で「我慢」すれば良いわけではありません。いやむしろ、「愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのよう驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びおどる者となるためです。」(Iペテロ四章十二〜十三節)と示されているように、迫害の中それを喜ぶべきです。

さらに、「あなたがたが召されたのは実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました」(Iペテロ二章二一〜二三節)とあるように、迫害の中、私たちは主に頼るべきです。迫害の中、主の知恵と力を求め、主に信頼しなせんと、恐怖に負け、主を裏切る者となります。

信教の自由は聖書の原則に基づくものですが、歴史上稀なものです。主も弟子たちも信仰の先輩たちの多くも信教の自由のない中、迫害に甘んじながら、忠実に主に仕え続けました。迫害の時代がそう遠くはないのかもしれない。殉教を間近にするパウロと共に「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました」(IIテモテ四章七節)と私たちも言えるように、今から主に頼りつつ、世に流されず、主と共に歩みましょう。

### 信教の自由が奪われた場合

信教の自由が奪われ場合、クリスチャンの私たちはどうすべきでしょうか。最後に三つのことを挙げたいと思います。まず、「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません」(使徒四章一九〜二〇節)とあるように、人よりも神に従うべきです。神を敬う聖書人物は迫害の中、主に従いました。私たちの主イエス様も弟子たちもそのように歩まれました。私たちもそのように歩むべきで

また、世の中ではコロナ禍を機に「グレート・リセット」の必要が訴えられています。ダボス会議、国連などが世界の国々に、このように呼びかけています。内容を見ると一見良さそうに見えるかもしれませんが、グローバルイズムの必要を訴えています。世界の統一がなければ、思い描いている「グレート・リセット」はうまくいかないのです。このような世界の統一と大艱難期のことを感じさせられます。